

## 中間取りまとめ素案（たたき台）

### 0 はじめに

- ・戦後 80 年を迎えた中、北方領土返還要求運動においては、これまで中心的な役割を担ってきた元島民を始めとする関係者の高齢化が進んでいる。
- ・今後一層運動を強化していく上では、新たな担い手の育成、支援が重要であるとともに、北方領土問題に関する理解を得ていくことが求められている。特に、次代を担う若い世代に対して、北方領土問題への関心を高め、かつ、理解を深めてもらうための啓発が必要である。
- ・その際、北方領土を直に見たり、元島民の方々から直接話を聞いたりすることが、若い世代が北方領土問題を自分のこととして考えるきっかけになると考えている。
- ・このため、北方領土隣接地域への修学旅行の誘致などの取組が行われているが、修学旅行で訪れた学生やその他一般の方に対する啓発の場として、北方領土問題の啓発施設が設置・運営されている。
- ・これらの啓発施設の多くが設置から相当の年数が経過し、老朽化が見られることからその在り方の検討が求められている。
- ・また、北方領土隣接地域は、北方領土返還要求運動の拠点であり、この地域の振興は重要な課題となっている。
- ・そのため、本調査研究においては、北方領土隣接地域に多くの人を継続的に呼び込み、北方領土問題に関する関心喚起、理解促進を図るとともに、隣接地域の振興にも資するよう、「北方領土隣接地域における地域一体となった啓発促進策」について検討を行うものである。

### 1 本調査研究の経緯

- ・令和 6 年 6 月、北方領土隣接地域の一市四町（根室市、別海町、中標津町、標津町、羅臼町）から、「北方領土隣接地域グランドデザイン」の策定について内閣府特命担当大臣（沖縄及び北方対策担当）に対して要望があった。
- ・これを踏まえ、令和 7 年度内閣府予算では、北方領土隣接地域に多くの人を継続的に呼び込み、北方領土問題に関する関心喚起、理解促進を図るとともに、隣接地域の振興にも資するよう、「北

方領土隣接地域における地域一体となった啓発促進策についての調査研究」を新たに盛り込み、令和7年4月から、「北方領土隣接地域における地域一体となった啓発促進策の検討に関する有識者会議」を開催してきたところである。

(参考)

- ・ 調査研究概要（ポンチ絵）
- ・ 有識者会議開催要綱

## 2 隣接地域における啓発活動の現状と課題

### (1) 隣接地域における主な啓発活動

- ・ 北方領土隣接地域においては、北方領土返還要求運動の拠点であり、隣接地域や北海道内の青少年などに対する各種啓発活動に加え、全国から隣接地域を訪れる青少年などに対しても様々な啓発活動を行っている。
- ・ その主なものとしては、例えば、  
「北方領土を目で見る運動」修学旅行等誘致、  
北方領土プロジェクト”N”（高校生Nサミットなど）、  
北方領土まで歩こう会、  
北方領土青少年洋上セミナー、  
北方少年少女塾、  
北方四島交流等事業使用船舶「えとぴりか」を活用した洋上視察・船内研修の実施、  
元島民の想いマップ、  
元島民の語り部の声のデジタル保存、  
「北方領土」隣接地域到達デジタル証明書、  
SNS等による情報発信（隣接地域現地予習動画など）、  
などの取組であり、引き続き、関係者が連携、協力して様々な活動を行っていくことが必要である。

### (2) 啓発施設の現状と課題

- ・ 施設、展示の状況  
北方館・望郷の家  
＜施設の概要＞
  - ・ 北方館（昭和55年8月開館）  
根室半島最東端・納沙布岬に位置。目の前に北方の島々を望む。

北方領土問題の発生の状況や歴史的経緯をわかりやすく解説した資料を展示

・望郷の家（昭和47年4月開設）

北方領土の島々を追われた元島民の心の拠り所として開設  
戦前の島民の生活関連資料や島々における街並みや住居表示  
を折り込んだ地図などを展示

＜担当者による説明の概要＞

- ・北方四島と北方領土隣接地域との位置関係
- ・北方四島在住のロシア人による根室への来訪状況
- ・北方海域の海産物
- ・終戦直後のソ連占領下における人々の暮らし
- ・北方領土の返還実現に向けた交渉の状況と展望

＜視察時の所感＞

- ・わずか3.7kmの距離にある貝殻島を始め北方領土を間近に望みながら、北方領土の地理や北方領土問題の歴史的経緯、元島民の望郷の思いなど、北方領土及び北方領土問題の基本的な知識を網羅的に得られる。

北海道立北方四島交流センター（ニ・ホ・ロ）

＜施設の概要＞

- ・平成12年2月7日オープン
- ・国内外の方々に北方領土問題について理解を深めていただくための啓発施設として、また北方四島に居住するロシア人の方々と交流を深める拠点施設として、双方の機能を兼ね備えている。
- ・愛称「ニ・ホ・ロ」は、日本（ニ）とロシア（ロ）をつなぐ北海道（ホ）の交流拠点施設、の意味

＜担当者による説明の概要＞

- ・1階展示室では、北方四島の歴史、戦前の四島の暮らし、四島との交流、四島のいまを、資料や映像機器などで紹介
- ・2階の北方資料館展示室では、北方領土に関する歴史的な写真、資料、物品等、貴重な資料を多数展示
- ・展示室のほか、交流ホール、視聴覚室等を備えている。  
北方領土の啓発事業や四島交流事業に使われていない時は、地域のコミュニティにも貸し出している。
- ・北方領土問題関係書籍をエトピリカ文庫として整備

＜視察時の所感＞

- ・実物資料をはじめ展示資料が充実。視聴覚機器も多数
- ・施設の機能が多角的。展示室以外の設備も充実

## 根室市北方領土資料館

### ＜施設の概要＞

- ・平成 28 年 12 月開設（旧根室市観光物産センターをリニューアル）
- ・北方領土の返還を願う人々の想いでつくる資料館
- ・「戦前の北方領土の生活」にスポットを当て、島での「衣・食・住」を中心とした資料を展示

### ＜担当者による説明の概要＞

- ・根室国後間海底電信線陸揚施設の紹介、根室国後間海底電信線（実物）の展示
- ・戦前の北方領土で撮影された映画の紹介パネル
- ・終戦直後のソ連占領下で撮影された北方領土の写真の展示
- ・北方領土の元島民から提供された、当時の四島の様子を記録した写真・画像、四島での生活道具の展示
- ・来訪者がメッセージを残せる掲示板の設置

### ＜視察時の所感＞

- ・戦前の北方領土での暮らしを、当時の写真・映像・実物資料などから知ることができる。
- ・元島民による寄贈品など、元島民にゆかりのある資料が多数展示されている。

## 別海北方展望塔

### ＜施設の概要＞

- ・昭和 57 年 10 月開館  
北方領土返還要求運動の正しい理解と国民世論の高揚のために建設。  
厳寒期に発生する別海町の風物詩「四角い太陽」のスポットとして知られる白鳥台に立地  
平成 23 年に道の駅に指定（道の駅おだいとう）。

### ＜担当者による説明の概要＞

- ・1 階がレストラン・売店、2 階が北方領土の展示室、3 階が展望室
- ・道の駅としてリニューアル後、来館者数が増加。野付半島での野鳥観察などを目的に、国内外から観光客が来訪
- ・道の駅は地域おこし協力隊が運営。地元産の食材にこだわったメニューの提供、別海町の特産品の販売など

### ＜視察時の所感＞

- ・北方領土啓発施設と観光施設の双方の機能を併せ持っている。

道の駅に立ち寄った人が、2階展示室・3階展望室に足を運び北方領土について学ぶ。

- ・道の駅は地域おこし協力隊により別海町の観光資源を活かした運営が行われている。

#### 北方領土館

##### <施設の概要>

- ・昭和54年12月オープン
- ・標津町からわずか24km先の国後島を間近に望みながら、北方領土の歴史が学べる資料館

##### <担当者による説明の概要>

- ・1階には、昭和20年当時の北方四島の暮らしを記録した写真、ビザなし交流の参加者が撮影した北方四島の写真を展示
- ・2階には、北方領土と根室管内位置模型図、元島民が描いた国後島集落詳細図、北方領土の歴史解説パネルなどを展示
- ・「北方領土を目で見る運動」による北方領土学習プログラムを取り入れた修学旅行の受け入れ（修学旅行生に対して、2階の展示フロアを利用して元島民による講話を行っている。）

##### <視察時の所感>

- ・写真資料が充実。昭和20年当時の北方四島での人々の暮らし、ビザなし交流を通じた標津町民と四島在住ロシア人との交流の様子を、貴重な写真資料から知ることができる。
- ・標津町在住の元島民による語り部活動の拠点となっている。

#### 羅臼国後展望塔

##### <施設の概要>

- ・平成12年2月開館
- ・海拔167mの高台にある羅臼国後展望塔から、わずか25kmしか離れていない国後島の雄大な姿が一望できる。
- ・平成26年度には新たに研修室を増築し、羅臼町の北方領土啓発施設の拠点となっている。

##### <担当者による説明の概要>

- ・施設内には、北方領土問題を分かりやすく解説した展示コーナーなどを設置。北方領土問題の歴史的経緯などを学ぶことができる。
- ・「北方領土を目で見る運動」による修学旅行の受け入れについて。羅臼町の基幹産業である漁業に触れながら、北方領土問題への理解を深めてもらう工夫
- ・羅臼町での元島民やその後継者による語り部活動の状況

### ＜視察時の所感＞

- ・ 高台に立地し、屋上から国後島の雄大な姿を望むことができる。知床羅臼の雄大な自然を間近に感じられる。
- ・ 元島民の高齢化が進む中、一世の実体験に基づく貴重な語りを映像に記録し、後世に継承する取組を実施。
- ・ 以上を通じて全体として、施設自体の老朽化への対応、展示方法・展示物のリニューアルやデジタル活用、複数施設間の位置付けと連携の明確化（複数施設で共通して持つべき情報発信の内容・機能と個別の施設の特徴や環境を活かした魅力づくり）、初心者にも分かりやすく・親しみやすい展示等の課題がある。
- ・ 来館者の分析（既存＋新規のデータによる分析）  
（数の推移、属性、観光・旅行の目的、宿泊先、啓発施設内での動向など）
- ・ 啓発施設におけるイベント等の開催状況

### （参考）観光等の状況

- ・ 一市四町への観光入込客数、宿泊客数
- ・ 観光客の主要訪問先
- ・ 修学旅行生の状況
- ・ 地域一体となった取組例
- ・ 一市四町内の博物館等の状況

## 3 対応策の検討の方向性

### （１）施設自体の老朽化への対応

- ・ 建物の老朽化への対応には準備・着手に時間がかかることから一部先行的・並行的に取り組む必要（建替え、補修などの検討）
- ・ 特に、北方領土館（標津町）については、老朽化が著しいことから建替えに向け、新たな施設の基本構想・基本計画の検討・策定のための経費を令和８年度内閣府予算の概算要求に盛り込んだところである。  
なお、基本構想・基本計画の検討・策定に当たっては、例えば、標津町役場、千島連盟標津支部その他の関係者によるワーキングチームなどを設け、新たな施設の開設後の地元における運営も見据えた様々な検討や意見の集約が必要である。  
その際、建替えの新たな場所については、来館者増や来館者の利

- 便性の向上の観点などから、標津サーモン科学館などとの連携強化を意識しつつ検討を行うことが望ましいのではないかと。
- ・その他の啓発施設については、それぞれの建物の状況なども踏まえ、必要に応じて補修などの検討・対応が必要である。

## （２）展示等の在り方

- ・各啓発施設の特色などの明確化について検討

隣接地域には複数の啓発施設が所在することから、それぞれの施設において、これまでの経緯や立地などを踏まえた展示などの特色・使命を改めて確認・検討することが求められている。その際、来館者に伝えたい「メッセージ」や「ストーリー」・「物語」の確認・整理を意識することが大切である。

例えば、北方領土に関する記憶や物語、風景などの資源を来館者にどう伝えどう感じてもらうか、何千年、何万年というスパンで考える視点も大事である。

（北方領土を含めた根室海峡沿岸は、もともと一つの生活圏であり、豊かな生活や文化があった。北方四島には、後期旧石器文化、縄文文化、続縄文文化、擦文文化、オホーツク文化、アイヌ文化の遺跡の分布が確認されている。）

なお、必要に応じて、協働型プログラム評価・ロジックモデルの活用も有益であると考えます。

- ・各啓発施設間の連携強化

上で述べた各啓発施設の特色などの明確化に係る検討の状況も踏まえつつ、施設間の連携の強化についても検討が必要である。

その際、隣接地域全体としての検討はもとよりであるが、特に根室市内の施設については同一市内に複数の施設（北方館・望郷の家、北海道立北方四島交流センター（二・ホ・ロ）、根室市北方領土資料館）があることから、個々の施設の特色を改めて確認の上、相互の連携強化についても検討し対応することが必要である。

そうした検討の際、例えば、根室市内の各啓発施設から実務的な担当者などが集まりワーキングチームなどを立ち上げ、連携強化や将来の方向性などの検討を行うことも有益であると考えます。なお、検討に当たっては、望郷の岬公園や四島のかけ橋の活用、根室市歴史と自然の資料館との連携も意識してはどうか。

- ・元島民・後継者との連携強化

展示等の在り方を考えるに当たっては、元島民・後継者の「使命感」、「語り伝えたいという意思」を受け止め、連携を強化していくことが大切である。

- ・ 次世代への継承（記憶の継承、活動の継承）

元島民の高齢化が進んでいる状況を踏まえると後継者の育成・支援への寄与がこれまで以上に重要となる。

元島民の記憶の継承、活動の継承の観点で、語り部、ミニ語り部、朗読劇、北方漫才などの様々な活動との連携強化が必要である。

- ・ 展示のリニューアル

上で述べた検討を行った結果、展示のリニューアルを行う場合には、展示のメッセージの立て方の検討・確認を改めて行う必要がある。

なお、リニューアルに併せて現在の古いコンテンツを何らかの形で良い状態で残すことについても検討が必要ではないか。

- ・ 持続可能な展示の入れ替え等の仕組みの検討

各啓発施設への来館者を増加・維持していく観点からは、いわゆるリピーター的な来館者も意識していく必要がある。

例えば、訪れるたびに何らか新しい発見があるような展示を意識する必要があるのではないか。

- ・ 企画展、ワークショップの検討

同様の観点で、時期を限った企画展や、ワークショップの開催も有益ではないか。

- ・ 説明、解説の充実

来館者の北方領土問題への理解を助け、満足度を高める観点で、「人が語る」という行為の意義の再確認が必要である。そうした意味で、例えば、ボランティアガイドの育成・活用が有益ではないか。

また、展示を見る前後や、その周辺での学びの機会まで含めて考えることが大事であり、来館者の理解の深まりをもう少し可視化できる仕組みの検討も必要ではないか。

- ・ デジタルアーカイブの充実

現在、多元的な資料を視覚的に連携させてストーリーを描き出し、当時の社会・生活等様々な角度から直感的に訴えることがで

きる仕組みを設けたシステムである、北方領土ストーリーテリング・アーカイブの構築が進められており、こうしたものなどを啓発施設においても活用していくことが必要ではないか。

- ・ PR の強化

各啓発施設への来館者を増加・維持していく観点からは、啓発施設の存在を知ってもらい、興味を持ってもらうことが大事である。そうした観点で、アニメや映画、文学といったメディアを活用した観光戦略や誘導の検討も必要ではないか。（例えば道東出身の作家やクリエイターとの連携など）

また、インターネット上で多くの人がコンテンツに参加できるような仕掛けの検討も必要ではないか。（例えば、「自分が送ったメッセージがいつまでも展示されている」、「展示館の様子をリモートで常に見ることができる」など。）

- ・ 各施設の地元におけるマネジメント

上で述べた項目のうち、元島民・後継者との連携強化、次世代への継承、展示の入れ替え、企画展・ワークショップの検討、ボランティアガイドの育成、デジタルアーカイブの充実などの活動は、いかに継続するか、いかに相乗効果を発揮するか、がポイントになる。

そのため、各施設の地元におけるマネジメントについてそれぞれ検討を行うことが望ましいと考える。

（地元の既存の関係組織を緩やかに束ねて、各活動の企画・実施・評価などに取り組むイメージ）

- ・ 展示等に係る共通的な考え方の整理

上で述べた各項目の検討状況も踏まえつつ、各施設における展示等に係る共通的な考え方の整理を行うと良いと考える。

例えば、各施設共通して同じ内容を展示するものと施設ごとの特色を出すものの考え方、展示手法や伝え方で共通して留意すべきこと、地域の観光資源との連携強化の方策などを盛り込むことが考えられる。

### （３）その他の取組等

- ・ 本調査研究は、「北方領土隣接地域における地域一体となった啓発促進策」について検討し、北方領土問題に関する関心喚起、理解促進を図るものであるが、併せて北方領土隣接地域に多くの

人を継続的に呼び込み、隣接地域の振興にも資することも念頭に置いたものである。

そのため、上で述べた啓発促進策の在り方の検討に加えて、観光面の取組との関係についても意識する必要がある。

- ・ その際、北方領土隣接地域の一市四町の観光担当課や観光協会が参画している「知床ねむろ観光連盟」などと連携し、例えば、以下の観点から検討を行ってはどうか。

一市四町への観光入込客数を伸ばす観点での取組

（宿泊、移動の利便性向上？）

一市四町への観光入込客の中で啓発施設への来館者数を伸ばす観点での取組

他の観光施設等との連携強化（周遊を意識した連携？）

- ・ また、啓発施設と地域との連携強化、啓発施設も活用した一市四町との関係人口の維持、拡大についても検討を行ってはどうか。

地域との連携強化

（地元でもっと使われるようにするには？）

（文化的コモンズの考え方？）

（地域の多様な関係者の巻き込み。移住者、地域おこし協力隊との連携）

関係人口の維持、拡大

（ふるさと住民登録制度の活用？）

（大学等のゼミとの交流（夏のゼミ合宿の呼びかけ））

（参考）施設や取組の例

- ・ 鮭の聖地の物語
- ・ 中標津しるべつなぎ構想
- ・ オホーツク遺跡街道構想
- ・ 広島の被爆体験伝承者
- ・ 広島平和記念資料館
- ・ 北海道赤レンガ庁舎
- ・ 富山県北方領土資料館
- ・ 領土・主権展示館（内閣官房）
- ・ 長岡戦災資料館
- ・ 舞鶴引揚記念館
- ・ 東京都人権プラザ

- ・ 埼玉ピースミュージアム（埼玉県平和資料館）
- ・ 野尻湖ナウマンゾウ博物館
- ・ 北方領土の記憶を継承するワークショップ（標津町）
- ・ 地方空港を活用した教育旅行誘致の連携と協力に関する協定（北海道根室振興局、一市四町、旅行会社などが締結）
- ・ 根室半島一周北方領土啓発バス運行事業（のさっぷ号）

#### 4 おわりに

- ・ 今回の有識者会議においては、隣接地域における啓発活動の現状と課題を確認した上で、対応策の検討の方向性について整理を行った。
- ・ 令和8年度においては、今回の整理を更に深堀し、展示内容・手法の充実・強化、施設間の連携方策、効果的な集客促進方策等について議論するとともに、地域一体となった隣接地域の振興にも資する啓発促進策について議論を行うことを期待する。